皇學館大学教育学部研究報告集　第二号
平成二十二年三月

キャリア教育の視点から高校における国語教育を考える

―継続的におこなったディベート授業を具体例に―

中條　敦仁

キャリア教育の視点から高校における国語教育を考える

―継続的におこなったディベート授業を具体例に―

中條　敦仁

はじめに

学校教育の基本は、こどもの将来の進路選択・職業選択に備え、学校全体の活動で必要な知識や能力を身につけさせるところにある。そのために教員は、こどもが自身の将来のことを考え、その達成のために必要な知識や能力の獲得に主体的に動くような環境を整え、こどもの描いた目標や夢を現実化するよう手助けをすることが大切となる。

しかし、現状は必ずしもそうはなっていない。もし、現状が先に示した学校教育の基本のようになっていれば、「キャリア教育の視点」から「国語の授業」を考える必要もないのである。

特に、進路選択・職業選択を一番迫られる高等学校（以下、高校 と表記）の教科教育では、教師主体の授業が展開されやすく、生徒主体の活動が少ないために、生徒自身が自分の将来のために自ら欲して能力獲得に動かない（動

けない？）傾向にある。そのために、将来の進路選択・職業選択に備えるために必要な知識・能力がよりよく育成できず、生徒にそれらが定着していないのではなかろうか。この現状を打破するためには、キャリア教育の視点から教科教育をおこなうことも考えていく必要があると考える。

稿者は、以前高校の国語科教員であったこともあり、本稿では、キャリア教育の視点から国語教育をおこなう必要性を説き、その上で、稿者が授業者としておこなった「ディベート授業」を具体例として、キャリア教育の視点に立った能力育成が教科教育でも可能であることを述べたいと思う。

一、高校生の進路先の大学入試や企業採用試験について

高校生が卒業までに積んだ知識や能力を持って、将来へと進む最初の関門である進路先の大学の入学試験や企業の採用試験ではどのようなことが求められているのかを概観する。

1、大学入試の様相

大学入試は多様化している。本学（皇學館大学）の二十二年度入試をみても、「ＡＯ入試（エントリーシート・面接）」、「スポーツＡＯ入試（エントリーシート・面接）」に始まり、「一般推薦入試Ａ（小論文か基礎学力試験・面接）」、「資格取得者対象自己推薦入試（指定検定２級以上・面接）」、「一般推薦入試Ｂ（１科目・面接）」、「一般入試」、「センター試験利用入試」などいくつもの入試パターンが設定されている。

これら入試をみると、現状は、従来の学力の達成度をみる入試のみならず、傍線を引いたように「エントリーシー

ト」「小論文」など思考力、執筆力を問う入試、「指定検定２級以上」「基礎学力試験」など基礎力を問う入試、「面接」でコミュニケーション力と臨機応変に対応する力を問う入試が設定されている。

他大学でも、さまざま入試方法をとっている。たとえば、共立女子大学のＥＱＩＱ（エクイック）入試は、特徴的である。ホームページをみると、「ＥＱＩＱ」とは、「ＥＱ＝情動能力（自己認識力、他者理解力、主体性、社会性など）」、「ＩＱ＝知的能力（論理的思考力、分析力、洞察力、表現力、発想力など）」ならびに「ＥＱＩＱ（上記２能力を総合した人間としての力）」を問う試験であると書かれている。傍線を付した箇所をみても明らかなように、社会人となるために必要な基礎能力を大学受験段階で問われていることがわかる。

近年の入試は、本学のＡＯ入試や共立女子大学のＥＱＩＱ入試の他にも、一芸入試や自己アピール入試、パワーポイントを使った五～十分のプレゼンテーションを課す入試など、学力とは別次元のいわば、社会人となるために必要な最低限の能力を持っているのかを試すものが多く設定されている。

2、企業の採用試験の様相

高校卒業予定者に対する企業の採用試験の方法や内容は、大学卒業者のそれとは異なる。

原則として、公共職業安定所が求人票を受け付けた後、各高等学校へ求人情報が送られ、七月一日以降、一斉に企業による学校訪問などの求人活動、生徒の就職活動が始まる。さらに、一人一社の応募を原則とし、十一月一日以降、複数応募が開始される。このように、高校生が就職する場合、大学生のそれとは違い、多くの制約がある。この制約の中で、企業は優秀な人材、自社にとって有用な人材を発掘していくことになる。

その際おこなわれる採用試験内容は次に示したａ～ｇの内容を組み合わせたものとなっている場合が多い。

a、書類（調査書など）　b、面接　c、作文（小論文）　d、実技　e、適性検査
f、一般常識試験　g、学科試験（国語・数学・英語・社会・理科）【国語が課される場合が多い】

高校生に対する二十二年度採用分の三重県内および周辺県の求人票の一部をみると、試験内容の組み合わせてとして圧倒的に多いのが「書類 ＋ 面接」である。以下すべて書類を含んだ上で、「作文 ＋ 面接」、「一般常識試験 ＋ 面接」、「適正検査 ＋ 面接」が次に多く、さらに「学科試験（国語） ＋ 面接」、「学科試験（国語・英語）あるいは（国語・数学） ＋ 面接」、「学科試験 ＋ 作文 ＋面接」などが続く。

まず、面接は必須の事項のようである。その上で、自身の考えを伝えられるか、常識をわきまえているか、職種に対する適正はあるか、という点が問われている。書類（調査書）で「高校卒業程度の学力あり」と判断しているのか、学力が問われることはそう多くはない。あるいは学力以上に社会人としての資質を試されているのであろうか。

3、進学・就職をするために求められる能力

高校生が進学・就職する時、通常の小学校から積み上げてきた教科に関する学力は当然必要となる。しかし、一方で、近年は社会人として必要最低限度能力があるか、自立的に活動できるかを試すことも増えてきている。

このことを考えると、高校在学中に、さまざまな方面からのアプローチにより、学力の向上だけでなく、求められている能力を高めることが重要となる。そして、その能力を高めるためには、職業観の育成とともに、社会人となるために必要な能力の向上を促すためのキャリア教育が必要となる。

二、高等学校におけるキャリア教育

1、文部科学省による高校生に対するキャリア教育推進について

キャリア教育について文部科学省は、平成二十一年三月公示の「高等学校学習指導要領（新学習指導要領）」において（1）職業的観点、（2）教育課程的観点の二点から次のように記している。

（1）職業的観点（以下、引用）

学校においては、キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るように配慮するものとする。

【第一章 総則・第5款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項・4-（3）より引用】

（2）教育課程的観点（以下、引用）

生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること。

【第一章 総則・第5款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項・5-（4）より引用】

これまで記されなかった「キャリア教育の推進」という文言が高等学校新学習指導要領に加わった。文部科学省は、

教科教育による知識の獲得のみならず、学校の教育活動全体を通じてキャリア教育をおこなうことによって、主体的な進路選択と将来社会人となるための能力を身に付けさせることをも視野に入れていることがわかる。

また、平成二十一年七月三十日に発表された中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会の審議経過報告書「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、学校におけるキャリア教育の指針のようなものが示されている。そこに「3、高等学校におけるキャリア教育・職業教育の充実と高等学校の在り方」という項目が立てられている。(注1) その中に、(3) 教科教育的観点からのアプローチについて次のような記述がある。

(3) 教科教育的観点（以下、引用）

＊　キャリア教育の視点が「授業を変える」きっかけを作るという視点に立ち、進路指導の中核的な実践の場である特別活動を有効に活用するとともに、教科の中での学習活動を充実することが重要である。そのためには、各教員が教科指導に当たって、キャリア教育の視点を取り入れるように努めるとともに、指導の在り方の研究や教材の開発、取組事例の収集・情報提供などを充実していくことが望まれる。また、キャリア教育の推進のための中核となる時間を高等学校の教育課程に位置付けることについては、更に検討が必要である。

＊　将来の進路選択の幅を広げる観点から、就業体験活動など多様な体験活動の機会を設けることが必要である。

（注）・体験活動の実施に当たっては、学校において、事前・事後の指導を充実し、年間指導計画や各教科・科目等の指導計画に明確に位置付けることにより、一貫した教育課程による実施が必要である。

・就業体験活動の実施には多様な受入先の確保と協力が不可欠である。また、学校・企業等の双方が長期間強練できるような工夫も必要である。

【3、（1）各学科に共通する課題、特に普通科の課題と改善の方向性　②推進方策、指導の在り方 より引用】

傍線で示したように、教科指導にキャリア教育の視点を取り入れ、教科教育の中でもキャリア教育を充実させること、そのために、指導の在り方に関する研究、教材開発をおこなうことの重要性を説いている。

つまり、（1）（2）（3）の観点から、キャリア教育を従来の職業指導的な狭い範疇のものではなく、教科指導をも含めた教育課程全体でおこなうものと捉え直し、高校生が主体的に自身の将来や職業を見据え、必要な基礎能力獲得の保障と、そのための支援をおこなうことが今後の高等教育の在り方だと提言しているのである。

2、キャリア教育の定義と身につけさせる能力

そもそもキャリア教育とはどういう教育か、さらにどのような能力を身につけさせればよいのか。そこで、（1）キャリア教育の定義、（2）身につけさせる能力について記しておく。

（1）キャリア教育の定義

文部科学省のまとめた「キャリア教育推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」[注2]では、キャリア教育を次のように定義している。

○　児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育

ただ、この定義のみでは不十分と考える。そこで各地域における研究会や先学の著書・論文に示されている定義を分析し、核になる要素のみを取り出しまとめると次のようにいえる。(注3)

◎　学校での教育活動全体を通して、児童・生徒一人ひとりに勤労意識や職業観を持たせ、働くために必要な知識や技能を身につけさせると同時に、自己の個性を理解し、今後の生き方を模索しながら、主体的に自身の将来設計を行い、進路選択をしていくための能力や態度を育てるもの。

(2)　身につけさせる能力

文部科学省は、同報告書で、キャリア教育によって身につけさせる能力として「四領域八能力」を示している。

＊人間関係形成能力（自他理解能力、コミュニケーション能力）
＊情報活用能力（情報収集・探索能力、職業理解能力）
＊将来設計能力（役割把握・認識能力、計画実行能力）
＊意思決定能力（選択能力・課題解決能力）

この「四領域八能力」を、本稿二―（1）で示した①職業的観点、②教育課程的観点、③教科教育的観点の三つの観点から全学的に育成することが高校現場に求められているのである。

三、国語教育とキャリア教育をどう関連付けるか

1、一つの方法としての継続的ディベート授業

当然ではあるが、全学的に「四領域八能力」を身につけさせればよいのであるから、教科教育だけですべての能力を身につけさせることを求める必要はない。各教科・科目の特性を生かし、育成できる能力に絞ればよいであろう。

では、国語教育の立場からは、どのような方法で「四領域八能力」のうちどの能力の育成ができるであろうか。稿者は、一つの方法として、国語の授業、特に現代文の授業において生徒主体のディベートを継続的におこなうことでいくつかの能力育成ができるのではないかと考えている。

「ディベート」を『新明解国語辞典（第五版）』で引くと、「ある話題について、肯定する側と否定する側の二組に分かれて討論すること」とある。

ディベートをおこなうためには、まず、「a、四人以上の人員が必要」（二人以上でもよいのかもしれないが、「組」ということを考えると四人以上が妥当か）である。さらに「b、共通の話題（課題）」がなければならない。その上、「c、肯定する側と否定する側にうまく分かれる」ことによって初めて「d、討論する」（自己の主張を論理的説明により相手に伝え、理解や納得を促す）ことができるということがわかる。

この条件を満たし、状況が整い、ディベートをおこなったとすると生徒には、前掲「四領域八能力」のうちの多くの能力が必要とされる。

○生徒に要求される能力

（a内容）複数名の人員がいることから、会話を成立させるための「**コミュニケーション能力**」

複数名の人員と関わるための「**他者理解能力（自他理解能力の内）**」

（b内容）共通の話題（課題）が提示されることから「**課題解決能力**」

（c内容）肯定側・否定側に分かれるため自己の内面を見つめる「**自己理解能力（自他理解能力の内）**」

肯定側・否定側どちらに行くかを決める「**選択能力**」

（d内容）討論するための材料を探すための「**情報収集・探索能力**」

討論をするためにそれぞれがどのような仕事をすればよいかを考えるための「**役割把握能力**」

このことから、現代文の授業にディベートを取り入れることは、キャリア教育の視点を教科教育に取り入れる方法として理論的には有効であることがわかる。

2、ディベート授業を継続的におこなう理由

一九九〇年以降、ディベートの実践報告や研究論文が多数発表され、以後、多くの著書やワークシートが発刊された。実践報告の多くは、学習指導要領の国語の四本柱である「読む」「書く」「聞く」「話す」、あるいは「伝え合うこと」の項目に則り書かれ、その内容は、単発におこなったディベートの実践報告と分析である。授業案として優れたものは多く、学ぶべき点は多いものの、生徒にそれら能力がどこまで定着したかは定かではない。

「習うより慣れろ」ということばがあるが、稿者が「継続的」にこだわった理由はまさにこれである。年に数回お

こなうだけでは、前掲の能力を身につけることはできない。キャリア教育の継続的に指導をするという観点と同様に、とにかく継続的におこなうことによって、討論することに慣れることが先決である。その上で、前回の反省をもとに次回をよりよいものにするという意識を生徒が持つことを通して、前掲能力が生徒の欲求の高まりとともに積み上げ的に身についていくと考えるのである。

四、実践報告と分析

キャリア教育とは何か、なぜ求められているか、さらに教科教育特に国語教育にキャリア教育の視点を取り入れるにはどうすればよいかを論じ、その方法として継続的にディベートをおこなうことが有効であるという一つの結論を提示した。この結論は理論的にはおおよそ受け入れられるものであろうと思う。

そこで、稿者が授業者としておこなった授業をサンプルに、生徒の意見を基にした授業分析、授業者の視点からの授業分析、自己評価をおこった上で、理論を実践と比較し問題点を整理しておきたい。

1、実践報告

（1）実施期間・対象クラスなど

実施期間は平成十八年度の一年間。科目は「現代文」で、学年は二年生の二クラス（Aクラス十六名、Bクラス十四名とする」を対象にした。

（2）使用教材・年間授業計画・討論のテーマなど

使用教科書は、第一学習社『高等学校現代文』[注4]で、十八年度一年間に使用した教材は、a．清岡卓行「手の変幻」、b、中島敦「山月記」、c、古橋信孝「知る―和語の文化誌―」、d、河合雅雄「道具と文化」、e、ねじめ正一「鳩を飛ばす日」、f、原民喜「夏の花」、g、北山晴一「衣服という社会」、h、夏目漱石「こころ」、i、「妖怪と現代文化」の九作品である（授業では、受験対策のための授業や問題演習もおこなっている）。

a～iの九作品を中心におこなった一年間の授業計画と討論のテーマを示したものが次の表である。

学期	作品（略号で示す）	討論のテーマ
一学期（四～七月）	a．「手の変幻」 b．「山月記」 c．「知る―和語の文化誌―」 **Ⅰ．教科書教材外**	a．ミロのビーナスの失われた両腕を復元することに賛成か、反対か b．李徴の生き方に共感できるか、できないか c．×【評論文を客観的・分析的に読む方法に関する授業をおこなった】 **Ⅰ．学校の給食にデザートは必要か、不必要か**
二学期（九～十二月）	d．「道具と文化」 **Ⅱ．教科書教材外** e．「鳩を飛ばす日」 f．「夏の花」 g．「衣服という社会」	d．ロボットに知能・感情を与えることに賛成か、反対か **Ⅱ．携帯電話のメールで謝罪することに賛成か、反対か** e．×【小説の構造分析の授業をおこなった】 f．×【心情表現をもとに心情変化の構造に関する授業をおこなった】 g．流行のファッションを追い続ける生き方に賛成か、反対か
三学期（一～三月）	h．夏目漱石「こころ」 **Ⅲ．教科書教材外** i．「妖怪と現代文化」 **Ⅳ．教科書教材外** ○受験に向けての問題演習	h．私（先生）のKに対する行動を許せるか、許せないか **Ⅲ．「恋する」とはどういう状態か（フリートークのような形で討論した）** i．×【評論文を客観的・分析的に読む方法を確認する授業をおこなった】 **Ⅳ．「事実を書くこと」について（小論文十他人作品の評価十討論）** ○問題集を使用した演習

右に示したうち、c・iでは、評論の客観的・分析的な読み方を、e・fでは小説の構造と心情変化の捉え方、つまり、ジャンルの違いによる構造の違いを知ってもらうためにディベートは設定していない。これは、対象クラスが進学中心のクラスであり、受験対策用の授業も必要であったからである。

（3）授業の流れ・ディベートの方法

四月授業開始後二時間を使い、次のプリントを配布し、ガイダンスをおこなった。

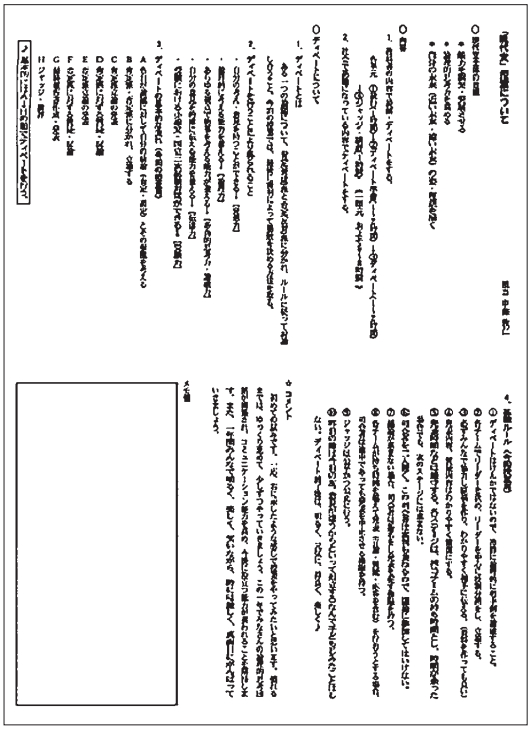


表2のうち、特に「内容」の1「各単元の流れ」と「ディベートについて」の3「ディベートの基本的な流れ」を取り出し、各単元の流れ、ディベートの流れを確認する。

○各単元　①読む（1～2時間）→②ディベート準備（1～3時間）→③ディベート（1～2時間）→④ジャッジ・講評（1時間）　《一単元、およそ5～8時間》

○3、ディベートの基本的な流れ（A～Hの順におこなう）

A　各自が論題に対して自分の結論（肯定・否定）とその根拠を考える

B　肯定派・否定派に分かれ、立論する

C　肯定派立論の発表

D　肯定派に対する質疑・反論

E　否定派立論の発表

F　否定派に対する質疑・反論

G　最終報告書作成・発表

H　ジャッジ・講評

ポイントは、第一時間目に討論のテーマを発表し、そのテーマで討論することを踏まえ、生徒個々人でじっくり本文を読み（教科書外の課題の場合は、課題を分析し）、自分はどういう立場（賛成か反対かなど）で討論に参加するか、根拠を持って決める点である。その後、同じ立場の人とともに話し合い、立論し、ディベートをおこない、質疑・

反論を交互におこない、その内容を踏まえ、さらに論拠を補強し、最終報告書の作成、再び発表するという流れとなる。

ジャッジ・講評は基本的に担当教員がおこなうことを当初想定したが、いくつかのディベートで結論が決められなかった生徒、途中で学校を休んでしまい、討論が充分でない生徒がジャッジをおこなうこともあった。

（4）実践報告①　―生徒作成の報告書の内容―

本稿では、討論テーマ「Ⅱ、教科書教材外　携帯電話のメールで謝罪することに賛成か、反対か」（前掲「ガイダンス用プリント」参照）を具体例として報告する。これを具体例として取り上げた理由は、次の二点である。

①ディベートに慣れ、生徒が主体的にディベートをおこない始めたと稿者が感じた最初のものだから。

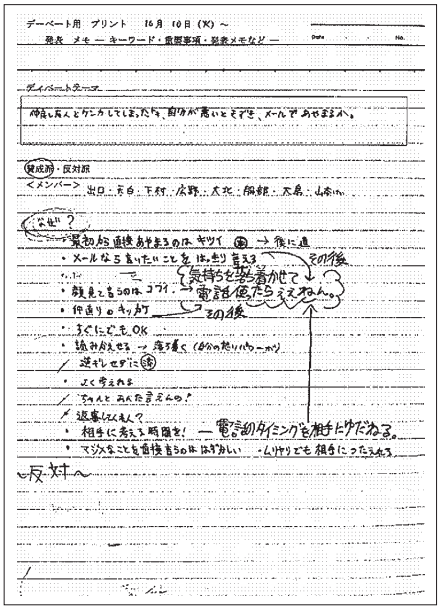
②このテーマの回のみ、個々人にディベートの報告書、ディベートに対する感想、授業でディベートをおこなうことについてどう思うかなどを書かせたから（ただし、Bクラス十六名のみ）。

授業計画に示したものは「携帯電話のメールで謝罪することに賛成か、反対か」であるが、実際は具体的場面を設定し、ディベートをおこなった。その内容は次の通りである。

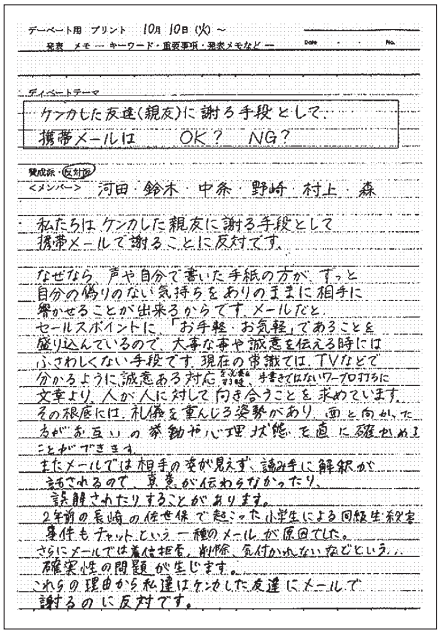
> 親友（いつも一緒に行動をしているようなもっとも仲のよい友達）とささいなことでけんかをしました。一人になってから冷静に考えてみると、自分が悪かったことに気づきました。そのような状況の中、あなたは謝る手段として携帯電話のメールを使うことはいいと思いますか、ダメだと思いますか？

平成十八年十月六日より授業を開始し、まず課題分析を一時間おこない、個々人で賛成・反対、どちらの立場を取るか根拠を持って考えさせ、その後、賛成派・反対派に分かれ、二時間かけて立論をおこなった（対象十六名のうち、二名が立論の時間に欠席し、ディベート当日はジャッジとなった）。そのとき次のようなメモが書かれている。

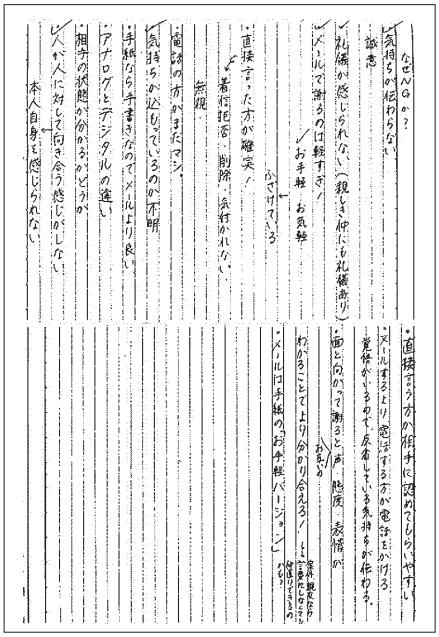
【賛成派メモ】



【反対派メモ】①



【反対派メモ】②



賛成派・反対派、それぞれで右のようなメモを取りながら議論をおこない、五分程度話すための発表原稿を作成し、発表をおこなった。

（5）実践報告②―個人で書いた報告書の内容―

報告書には、次の五項目を設定した。

○ディベートを終えて…

①自分の考えをまとめてください（賛成派・反対派を選ぶことと、自分の意見）。

②自分とは反対の立場をとっていた人の意見で、納得させられたこと、納得できなかったこと、気になったことを書いてください。

③ディベートを終えての感想を書いてください。

○授業でディベートをおこなうことについて…

④今後もディベートをおこないたいですか（はい・いいえ 選択）。

→（「はい」と答えた人に）今後どのようなテーマでディベートをおこないたいですか。

2、授業分析

（1）報告書の③・④をもとに教材外Ⅱ授業に対する分析をする

生徒の書いた報告書をもとに、生徒の立場からみたディベート授業の授業分析を試みる。

分析1…報告書項目③「ディベートを終えての感想」について

ディベートを終えたあとの感想をすべて示す（対象十六名で二名が未記入）。掲出本文の最初に記した「【賛】＝賛成」「【反】＝反対」の記号は、ディベート中の立場を示す。

a【反】とても楽しかったです。しかし、反対派には僕一人しか男がいなかったので、周りの勢いに押されてしまい、後半はあまり意見がいえませんでした。その点が反省点です。次からは自分も積極的に意見を言っていきたいです。

b【反】今回は「メール」という身近なもの、イメージしやすいものがテーマでしたが、いざディベートに向けて考えていくと、すごく難しいと思うようになりました。難しすぎてディベート本番では自分の意見を一言も言えませんでいた。それが心残りで、今回のディベートの反省点だなあと思います。次回ディベートでは、一回でも自分の意見を発表できるようにしたいです。

c【反】自分自身、友達にメールがあるのにわざわざ友達のいる所まで行ってケンカしたことについて謝りにいったことがあるので、とても身近に感じられて、客観性を欠いてしまって残念です。

d【反】言いたいことは言えたし、いつもより暴走の度合いが低かったと思う。みんないつも冷静ですごいと思う。これからも暴走を抑えるように努力しつつ、もう少し相手の発言を噛み砕いて考えられるように頑張ろうと思う。

e【反】最初どちらにつくか迷っていたから賛成派の意見に納得した所もあったが、やはり反対派の方についてよかったと思う。発言はしていないが、主張の部分に自分の意見を入れてもらえてよかった。

f【反】客観的で相手を納得させられるような意見を出すのがとても難しかった。

g【賛】身近で普段あまり考えないが、もしかすると起こりうる事について様々な意見を聞くことができた。メールで謝るという事について賛成したが、それによって相手がどう受けるかという事について考え直させられたように思う。今までそんな事を考えずにメールであやまっていたことがあった。これからはいろいろ考えて使っていきたい。

h【賛】実際のところ、自分はメールをほとんどしない。ディベートが始まる時賛成派と反対派に分かれたが、自分はどちらでもなかった。何故なら親しい友人達は皆小学校・中学校からのつき合いでケンカをしても

なし崩し的にケンカをした事は消えてしまう。それに前にも述べたようにメールをしないからだ。今までそんな感じで、たぶんこれからもそうだろうと思うが、このディベートで他の人のメールで謝ることに対する思い、出来事、といった議論を聞くことによって自分の考え方を豊かにすることができたと思う。このディベートを通して入試の小論文対策になればよいと思う。

i【賛】何も喋っていなくてもどんどん喉がカラカラになっていった。

j【賛】今回のディベートのお題は、ほぼ想像上で考えるしかなくて、とても難しいものだった。実際これから先、そんな事がおきても、時と場合と相手によって謝り方が変わってくるだろうと思いました。

k【賛】どちらの意見も相手の気持ちが見えないのでいまいち根拠に欠けるな、と思った。顔を見て謝るのが普通である。そっちの方が伝わるものがあると思う。けど、結果的に仲直りできればいいんじゃないかな？そうしたらメールを使ってもよい気がする（最初は）。今回は自分の意見がわからなかった。

l【賛】メールで良いの？と聞かれたら、「はい」とは答えにくいもので、かと言って直接伝えるのは難しいと思いながらで、意見は文では書けても口に出してはっきり言うことはなかなかできませんでした。言いようによっては単なる「屁理屈」となる意見にならないかと不安な気持ちでいっぱいでした。反対派の人の言う事はごもっとも、それが一番正しいと思うようになってから、反対派を否定するのはとても難しかったです。

m【賛】反対側のいいたいことが事前にわかるような気がしたから、原稿を作るときどういう説得をしていくかみんなで考えていけた。今回は初めて原稿を読んだ（発表者となった）けど、読み方によって相手への伝わり方が違うのかなって思った。

n【賛】どっちの対応がいいのかすごく悩んでいたけど、どちらも正しいと思います。最終的には直接謝るのだし…。時と場合と相手によって対応の仕方は変わると思うようになった。

a～nの感想をみると、1「自己の思考・行動分析」、2「反省」、3「次回での目標・決意」の三つの要素をもとに感想が書かれているものが多いことがわかる。たとえば感想aとbを例にして要素を確認してみる。

例1〔a〕

「とても楽しかったです。」

1「しかし、反対派には僕一人しか男がいなかったので、周りの勢いに押されてしまい、」

2「後半はあまり意見がいえませんでした。その点が反省点です。」

3「次からは自分も積極的に意見を言っていきたいです。」

例2〔b〕

1「今回は「メール」という身近なもの、イメージしやすいものがテーマでしたが、いざディベートに向けて考えていくと、すごく難しいと思うようになりました。」

2「難しすぎてディベート本番では自分の意見を一言も言えませんでした。それが心残りで、今回のディベートの反省点だなあと思います。」

3「次回ディベートでは、一回でも自分の意見を発表できるようにしたいです。」

三要素のうち、特に2・3の要素が感想に入ってくるのは、生徒が次回もディベートがあることを知っているからである。ディベート授業を継続的におこなうことで生徒が主体的に能力獲得に動く可能性が高くなるといえる。

また、本稿三―1に示したキャリア教育の視点から求められる「自他理解能力」「課題解決能力」「選択能力」の育成という点からみても、継続的ディベートは有効であるといえる。

たとえば、「自他理解能力」の育成については、感想dにみられる、

▼言いたいことは言えたし、いつもより暴走の度合いが低かったと思う（自己理解）。
　みんないつも冷静ですごいと思う（他者理解）」

や、感想hやlにみられる、

▼実際のところ、自分はメールをほとんどしない。ディベートが始まる時賛成派と反対派に分かれたが、自分はどちらでもなかった。何故なら親しい友人達は皆小学校・中学校からのつき合いでケンカをしてもなし崩し的にケンカをした事は消えてしまう。それに前にも述べたようにメールをしないからだ（自己理解）

▼反対派の人の言う事はごもっとも、それが一番正しいと思うようになってから、反対派を否定するのはとても難しかったです（他者理解）

などから、実践上でも効果的な育成ができるといえる。

また、「課題解決能力」「選択能力」の育成についても、生徒自身で課題を分析し、賛成派・反対派に分かれ討論をすることによってそれら能力は効果的に育成されていくといえる。

ただし、感想からは、「情報収集・探索能力」「役割把握能力」の育成に効果があったというものは得られず、今回のディベートの方法では、それら能力の育成をおこなうことはできないと考えられる。

分析2…報告書項目④「今後もディベートをおこないたいか」について

「今後もディベートをおこないたいか」という問いに対して、対象生徒十六名がすべて「はい」と答えている。この結果から、四月から始めたディベートの授業が生徒に受け入れられ、定着したといえ、継続的におこなうことは可能であることがわかる。また、今後どのようなテーマでディベートをおこないたいかという問いに対しては、次のような回答が返ってきた（対象十六名で五名が未記入）。

▼社会問題（少子高齢化問題や死刑制度など）
▼レジ袋を廃止すべきか
▼今の世界や日本のこと
▼思い浮かばない…
▼具体的な希望はありませんが、今後もなるべく身近なことをテーマにしてもらいたい
▼難しい問題じゃなくて、給食とか恋とかみんなが経験する身の回りの身近なことについてディベートしたい
▼教科書の内容で議論するよりも、社会の中の出来事など自分たちの身近で関心があるものがいい。
▼本はその内容によって規制されるべきか
▼お好み焼きは主食かおかずか
▼戦争について
▼わかりやすいもの

具体的なテーマの提示が多いが、それも含めていえることは、生徒は、身近なものをテーマとしてディベートをおこないたいという気持ちが強いということである。意見の中で特に気になるものは、最後に示した「教科書の内容で議論するよりも、社会の中の出来事など自分たちの身近で関心があるものがいい」というものである。授業者としては極力生徒が興味を持つようなテーマを設定したのではあるが、教科書に掲載された作品をもとにおこなうディベー

トに対して、生徒はあまり有意義に感じていない面も感じ取れる。

ここに、分析1、分析2の結果を簡潔にまとめておく。

分析1のまとめ

実践の上でも継続的ディベート授業は有効であり、キャリア教育の視点からみた「自他理解能力」「課題解決能力」「選択能力」の育成には効果があるが、「情報収集・探索能力」「役割把握能力」の育成に関しては大きな効果は認められない。

分析2のまとめ

「生徒にとってディベート授業は積極的・主体的に参加できるものであるが、教科書の内容をベースにしたものよりも、身近なものを題材にした方がより積極的・主体的に取り組め、テーマ設定がよりよいディベート授業をおこなうための鍵となる」ということがいえそうである。

（2）授業者の立場から教材外Ⅱ授業に対する分析・自己評価をする

授業者が実践当時に書いたメモを基本として、授業を客観的に振り返えることによって、教材外Ⅱ授業に対する授業分析・自己評価をおこなう。

実践当時書いた授業者のメモ

授業実践当時プリントなどに走り書きしたメモのうち、現存しており確認できるものを、書いた順に次に示す。メ

モの後に示した記号の意味は、【A】「授業に対する記述」、【B】「生徒個人の様子」、【C】「班別討論の様子」、【D】「授業者の個人的な疑問」で、内容によって分類したものである。

① 携帯電話の使われたかたなど現状把握をするための授業を先にすればよかったか。…【A】
② 賛成派・反対派にうまく分かれるか不安。みんな反対だったらどうしよう。…【A】
③ みんな反対派だったら、小学生に携帯電話は必要かに変える…【A】
④ 議論がしやすいように細かな設定をしたが、もっと大雑把でもよかったか。…【A】
⑤ ○○君ファイト!…【B】
⑥ ○○ちゃん何か暗いな。なんかあったのか?後で声をかけること!…【B】
⑦ 賛成派は議論が進まず、雰囲気が悪い。…【C】
⑧ ○○君、反対派なのに、実は賛成派?…【B】
⑨ 賛成派ちょっとケンカっぽい…【C】
⑩ おさまった…【C】
⑪ どうも○○の発言がきっかけみたい…【B】
⑫ ○○さんは、一所懸命にまとめようとしている。がんばれ。…【B】
⑬ 思ったより生徒がいい根拠を考えていた。よかった。…【C】
⑭ ○○さん、今回はがんばってるな。…【B】
⑮ 話し合いをみてると、反対派の方が優勢か?…【C】

⑯ 携帯電話で謝るというのは時と場合によるか。問題設定として×?……【A】
⑰ どちらの言い分もわかる。ジャッジが難しい。…【A】
⑱ 生徒にとってメールとはどのような存在か。…【D】
⑲ みんなに一日のメール回数を聞いてみた。一番多い子は一日に100通以上だった。すごい!……【D】

稿者は、よく右のようなメモを、配布したプリントや授業用ノート、自身の持つ出席簿の余白などに書く。特に、ディベートの授業は、生徒が話し合いをしている間の授業者の活動は、教室内をうろうろしながら、話し合いが行き詰っていそうならアドバイスをする程度であるので、その時の気持ちや生徒の様子をメモすることがしばしばあった。

当時のメモ①～⑲を分類すると、【A】は①②③④⑭⑮の六例、【B】⑤⑥⑧⑩⑪⑫の六例、【C】は⑦⑨⑩⑪⑬の五例、【D】は⑯⑰の二例である。

メモ分析と自己評価

この結果をみると、授業者が一方的に話している授業とは異なり、フリーの状態であるために、生徒が話し合っている間、「生徒個人の様子」「班の話し合いの様子」をまんべんなく、細かなところまで観察ができていることがわかる。また、授業者に余裕があるために、生徒の活動の様子から、ディベートの進め方や内容に対する反省をおこないつつ次回での改善点を見出すこともできている。

このような結果となったのは、教材外Ⅱ授業が、最初のa「手の変幻」授業から数えて、五回目のディベート授業であったために、生徒の討論の流れも固定し始めた上に、授業者自身もそれまでの経験により観察のポイントができ

始め、余裕を持った上で全体を見渡せるようになったからではないだろうか。

五回目の段階をみる限り、四月から継続的にディベート授業を展開してきた成果が出始めているといえ、生徒主体の授業の構築という観点からみると効果は高いと考える。

ただし、本稿「四―2―（1）」の末に記した分析1・分析2のまとめからみると、キャリア教育の視点からの能力育成として効果があったのは一部に過ぎず、授業者のおこなったディベートの方法では、本稿「三―1」に示した理論上から可能と考えられる能力育成すべてを網羅することはできていない。

五、理論と実践を比較して

今回具体例として取り上げたディベート「教材外Ⅱ授業」の分析結果から、理論上育成可能とした「情報収集・探索能力」「役割把握能力」については、育成できていないことがわかった。

しかし、この隔たりは、授業者の工夫次第で改善できるのである。そのためには、おこなった授業に対して、生徒の視点、授業者の視点、第三者的視点から授業分析をおこない、自己評価を重ねていくことが必要である。

たとえば、今回の「教材外Ⅱ授業」の結果を踏まえ、「情報収集・探索能力」「役割把握能力」を身につけることを考え、次回のディベートで改善することは可能である。生徒同士の話し合いだけでなく、図書館やインターネットを活用することで、相手を説得するために必要な情報を探索・収集し整理するという活動を増やし、さらに、情報収集する人、その情報をまとめる人、立論する人、原稿を作る人など、役割分担を明確にする指示を出すなどすることで改善が見込めるのではないか。

また、今回は、少人数クラスでおこなったために、ディベートをスムーズにおこなえた可能性が高い。三十人以上のクラスにおけるディベートの方法について、今後検討していきたい。

おわりに

キャリア教育の視点に立った教科教育における能力育成の必要性を述べ、さらに実践授業（ディベート授業）をもとに、国語教育におけるキャリア教育の視点に立った能力育成の可能性について述べた。紙幅の都合もあり、一年間継続的におこなったディベート授業の最終報告については、別稿で述べたいと考えている。

国語科教員は、児童・生徒に対して、従来どおり「読む」「書く」「聞く」「話す」の四本柱を基にした基礎教養や基礎知識習得を促すことは当然大切なことである。と同時、今後はキャリア教育の視点にたった、「対人関係」を円滑に築き上げていくための能力の養成も大きな使命となる。

今後、国語科のみならず、全教科的にキャリア教育の視点にたった目標が設定されていくことが予想され（議論が煮詰まっていけば、学習指導要領改定の際に新たな項目が設定される可能性が予想される）、その目標達成のための授業手法の確立や教材開発が求められていくであろう。

（注1）中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会の審議経過報告書「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」一四～二一頁記事参照、後引用部分は一六頁にあり。報告書は、文部科学省ホームページで閲覧可能（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/　平成二十一年度七月記事）。

（注２）文部科学省「キャリア教育推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」は、文部科学省ホームページで閲覧可能（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/　平成十八年度以前）。

（注３）定義作成にあたり主に参考としたものは次の通りである。

・日本キャリア教育学会（編）『キャリア教育概説』（東洋館出版社・二〇〇八年）

・児美川孝一郎『権利としてのキャリア教育』（明石書店・二〇〇七）

・鳥居徹也『キャリア教育の授業』（学陽書房・二〇〇七）

・高橋超・石井真治・熊谷信順『生徒指導・進路指導』（ミネルヴァ書房・二〇〇二）

（注４）平成十五年三月十日検定済、平成十八年二月十日発行版

参考文献

下村英雄『キャリア教育の心理学　大人は、子どもと若者に何を伝えたいのか』（東海教育研究所・二〇〇九年）

明石要一『（学級教育の改革シリーズ№７）キャリア教育がなぜ必要か　フリーター・ニート問題解決への手がかり』（明治図書出版・二〇〇六年）

児童心理臨時増刊（№八七三）『夢・憧れ・生き方　小学校からのキャリア教育』（金子書房・二〇〇八年）

瀬川栄志『（国語教育立国論№２）国語科教育の原点追究と改革課題』（明治図書出版・二〇〇八年）

大平浩哉『国語科教育改造論　次なる改訂への提言』（愛育社・二〇〇三年）

植松雅美『コミュニケーション能力の育成をめざした話し言葉の指導』（東洋館出版社・一九九六年）

安藤修平・相沢秀夫『（新中学校国語科経営講座４）「新しい音声言語指導」の開発と展開』（明治図書出版・一九九七年）

樋口裕子「話し合い能力と論理的能力に対するディベート授業の効果」（『大谷女子大学国文』第三十六号・平成十八年三月）

〔付記〕

小稿をなすにあたり、大学入試の現状や高校生の就職の流れや就職状況などについて皇學館高等学校進路指導部の先生方、特に就職状況等について、進路指導部就職指導担当の東博美先生に多くのご教授をいただいた。末筆ながら、ここに厚く御礼申し上げる。